

「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部
創立10周年に寄せて

76

「じょうざん」という、を紹介してくれました。言葉を初めて耳にしたのは、もう十数年前になるでしょうか。住田町出身の菊池健一氏がリーダーをつとめるバンドの年初めの恒例行事ダンスパーティー会場でのことでした。パーティーに参加していた菊池氏の同郷の友人から聞いたのです。菊池氏の友人は長身な方でしたが、私に身をかがめるようにゆったりと五葉山のことを話し出しました。

あゝ、あの時の「五葉山」を思いながら「五葉山の魅力」リレーエッセイと向きあっています。自然景観や動物、植物のことにとどまらず、畏敬の念を持つてかけがえのない自然を後世へ伝え、残していくこととする人々の姿がそこにはありました。

神秘的な山であること、頂上から一望できるリアス式海岸のすばらしい眺め、ヒノキアスナロやブナの森のこと、シカやサル、クマのことなど

自然派カメラマンでもあった伊藤正逸さんの歩みに深い共感を覚えまして。一人ひとりの歩みは、通り過ぎていく月日を経ても色あせることなく、「五葉山」を介して心の景色として色濃く存在していることを実感させてくれます。お一人おひとりのように林立する広葉樹群、森の中を縫うように流れる大股川。そこが菊池氏のふるさとでした。いつも笑顔で人をくつろがせ、誠実で真剣な彼の所作に、生まれ育った豊かな自然環境が大きく作用しているのではな

私は、司会や企画の仕事を通して人と人との出会い、交わりから「縁」の大切さを教えられていました。

出会いは、人生を語らせ、経験を伝え、想いをめざめさせます。そのことは一人ひとりの存在をあらためて認識させ、その人となりを尊重していくことに繋がっていくのではないのでしょうか。「五葉山の魅力」リレーエッセイは、私たちに「感じる力を取り戻そう」と呼びかけているようにも思います。豊かな自然に抱かれて回復していく感性の力。感じる力は、他者の痛み、悲しみ、苦しみに寄り添える力になり、しなやかで弾みのある社会は想いをほせる心根によってかたちづくられていくことではない

菊池氏との交流、彼の同郷の友人との出会い、リレーエッセイとの対話——。見えない糸で今、しっかりと五葉山と繋がっています。

今日の五葉山は誰にどんな表情を見せているのでしょうか。誰がどんな想いで五葉山をみているのでしょうか。あの時と同じ五葉山の美しいイメージが、深みと広がりを増してどこまでも広がっています。

【執筆者プロフィール】一九四六年生まれ。宮城県仙台市在住。向メディア仙台代表取締役、宮城県社会福祉協議会（みやぎいきいき学園講師）、助東北ニュービジネス協議会理事・広報委員、仙台市科学館協議会委員。

縁でつながる「五葉山」

宮城県仙台市 村上 恵子

とりのエッセイに、私が初めて種山ヶ原を訪れ、雄大な眺めに息をのみ、じっと佇んでいたことと重なりました。

司会の仕事で住田町を数回訪れています。いつも脳裏に浮かんでくる風景があります。種山峠を下り、大股・小股に向かう国道の両側に展開する風景です。

いかに想像しました。無駄を嫌い、まっすぐ突き進むことを是とし、その結果として手に入れた「便利さ」「豊かさ」はいったい何なのだろうか、とふと考えることがあります。急ぎ足で駆ければ駆ければ、人々の孤独感や疎外感が深まっていくように思えるのです。

「エッセイは、私たちに「感じる力を取り戻そう」と呼びかけているようにも思います。豊かな自然に抱かれて回復していく感性の力。感じる力は、他者の痛み、悲しみ、苦しみに寄り添える力になり、しなやかで弾みのある社会は想いをほせる心根によってかたちづくられていくことではない



五葉山頂上の「お花畑」(シャクナゲの群落地)。初夏多くの人たちが訪れる